

百五年の歴史に新たな挑戦

長尾 演 雄

I はじめに

私立大学にはそれぞれに建学の精神があり、したがって各私立大学の歴史は、その建学の精神を引き継ぎ、時代に即して見直し、練り直し、発展させるというたゆまない努力と、建学の精神に支えられた日常的教育実践の積み重ねであると言えるだろう。実践女子大学は、学祖下田歌子が上流女子教育の教授の職を辞し、日本の女性全体のレベルを底上げし、女性の精神的・経済的自立を支援したいという思いから設立された。学祖は、学問は「机上のものにあらず」という教育理念と教育方針から「実学」を提唱した。この下田歌子が提唱した女子教育の重要性と「実学」の精神が、実践女子大学の建学の精神である。

学祖生誕150年にあたる今年の4月(2004年4月)に発足した私たちの人間社会学部は、この建学の精神と学祖が傾注してきた女子教育への情熱と教育理念をどのように引き継ぎ、生かし、時代に即したものに発展させるのかの新しい試みを行ってきた。その試みのいくつかをここに記し、また、いい機会であるので、発足して数ヶ月が経過した今日、私たちの試みへの学生の反響を整理し、それへの私たちの取り組みを記しながら、本稿の務めを果たしたい。

II 時代認識と人間社会学部の理念

(一) 時代の動向と「知」の再構築

学祖は、時代の動向を正確に認識し、時代によく対応し、時代を創造していくという強い意志を示した。また、日本と世界の関わりを大きく捉え、社会に目を開いて、現実をしっかりと見据えていくことなしに、女性の自立はあり得ないと、百年も前に語っている。

人間社会学部の学部の精神と理念に、それがまず引き継がなければならないと、私たちは考えた。それは、次のようにである。

経済の今日のような国際化の進展や交通・通信手段の発達、世界中の人々と地球上の資源とを広く深く結びつけ、国際社会が、ますますその相互依存を強め、地球規模の協調と共生の必要

性を一層強めてきている。これが一つの側面だとすると、いま一つの側面としては、地球規模での競争がより一層激しくなり、国際競争力の強化が国家的にも重要な課題になってきていることである。さらには、国際的な紛争の問題、地球温暖化の問題、地球の環境問題、エネルギー・資源の問題、開発と貧困の問題、人口問題等々、人類の生存を脅かすような問題をはじめとして、地球規模で急いで解決に取り組まなければならない諸問題に直面する局面がますます増加してきている。その意味では、地球は急速に小さくなってきており、地球上の出来事と私たちの日常生活とが非常に緊密に結びついてきていると言わなければならない。

このような経済の飛躍的な発展と国際化の進展は市場経済的な社会関係を私たちの社会の隅々にまで浸透させてきてるし、また、科学技術の発達、情報化の進展、社会の近代化の進展は、豊富な商品に、電化製品・情報機器やブランド商品に囲まれた「近代化された生活」を私たちにもたらした。しかしながら、このような事態の進展は、家族や地域社会のような「親密圏共同体」の機能を衰退させ、人々の結びつきを弱め、人間関係を希薄にしてきている。また、産業構造や雇用形態に大きな変化が生じ、女性の社会進出の条件も成熟してきているが、しかし同時に、少子高齢社会の動向もいっそう進展してきているという具合である。こうした社会変化が急激であるばかりでなく、うえに見てきたように、諸変化が複雑に絡まり合いながら、今後も一層急速に進展していくことが予想される。

そうすると、21世紀は、従来の延長線上の発想と思考ではその対応が非常に難しく、これまでも増して流動的な社会になり、将来予測が明確につき難い、先行き不透明な時代になると考えられる。したがって、いま起こっている社会現象や社会的出来事の一つ一つから、私たちが生きている今日の時代がどのような時代であり、そしてそれはどこへ進もうとしているのかという時代の動向を正確に読み取ることができる学際的で総合的な「知」の再構築が強く求められる時代であると言わなければならない。人間と社会を多角的に科学することが求められている時代だと、私たちは考えている。

(二) コミュニケーション能力の形成と大学教育

「1905年に留学生部を設け、清国女子留学生の受け入れ」にうかがえる学祖の精神を、どのように受け継ぐのか。今日の大学における、異質な他者とのコミュニケーション能力の形成の前に横たわっている課題はどのように捉えなければならないのか。

私たちの人間社会学部は、以下のように考えた。

社会・経済が、今、観察されているようなドラスチックな転換期の時代には、当然のこととして、子どもたちの成育過程にも大きな変化が生じてくるであろう。大学教育が、時代の要請に応えるためには、社会の急速な変化に柔軟に対応し、学生たちの知的欲求や学問的な要求によく応えるためには、いま学生たちが育ってきている生育過程を全面的に視野に入れて、入学してくる学生たちが置かれている生活と学生たちが現実に抱いている生活意識の有り様をよく認識していないなくては、不可能なことである。

彼らの生育過程に見られる顕著な特徴の一つを、私たちは次のように捉えてみた。

今日の青少年たちが取り結んでいる人間関係・社会関係の多くは、「商品や情報」を媒介にして取り結ばれる人間関係・社会関係であるが、しかしそれは、地球規模に拡大している。彼らの消費生活は地球規模で世界中の人々の労働と資源とに深く結びつくことになった生活だと言える。その意味では、彼らの生活が諸外国に強く依存するようになってきているということである。

これは、地球規模での協調と連帯、そして共生の客観的な条件が成熟してきているということであるが、しかしながら、彼らが、日ごろ対話し、心を通い合らし、面接して取り結ぶ具体的な人間関係は、非常に希薄になってきている。このことは、彼らのコミュニケーション能力、対話能力を発達させるような「土壌」や「社会的装置」が極めて貧困になってきている生活であると捉えなければならない。こうした生活は、他者への思いやりや関心を育みがたいものと言わなければならない。私たちの人間社会学部が、対話能力・コミュニケーション能力を意識的に育成していくことを、重要な課題として掲げるゆえんは、ここにある。

(三) 人間を基本に据えた実学

私たちが、ことさら「人間」を冠にした社会科学の学部を創ったことに少し触れておこう。

今日の子どもたちは、居間に居ながらにして、地球上で起きている「戦争」や「国際紛争」、
「飢餓に苦しむ子どもたちの姿」を映像で目にすることができるようになった。しかしながら、そうした悲惨な出来事が遠い世界の出来事で、自分とは無関係な出来事であると受けとめてしまいがちな毎日であるし、人間的な痛みや悲しみや憤りをもって受けとめられないでいるのが偽りのない現実である。

自分が置かれている現実や生活の成り立ちを正確に捉えることの難しさの問題が、さらに言うと、マスメディアを媒介にした「間接体験の肥大化」と「直接体験の希薄化」という生活の問題がここには示されている。人間を前面に据えて捉え、人間の生活と意識の成り立ちから社会現象や社会問題にアプローチする学問のあり方が問われているし、人間のあり方を問い直す問題がここにはあると考えている。

いま一度、これまで述べたことを要約すると、21世紀の私たちの生活が、地球的な規模でつながりを強め、社会が国際的な相互依存をますます強めていくとすると、どこの地域で生起する出来事であっても、われわれに無縁なものなど何に一つないことになる。したがって、私たちが日ごろ直面する出来事を、「地球的な視野で考え、そしていま住んでいる場所で、それによく対応する」という認識や活動にかかわる諸能力とそうした生活の仕方を学び、身につける教育が強く求められている時代になってきている。

日々遭遇する事件や出来事から、いまどのような時代に生きているのかを読み取り、それにどのように対応するのかを総合的に判断できる能力が、「職場」で仕事をするうえでも、地域や家庭で自立した市民として、家庭人として活躍するうえでも極めて大切なものになってきている、と言わなければならない。学問が机上のものにとどまらず、実際の生活に活かされるものでなけれ

ばならないという、学祖の「実学」が強く求められていると言わなければならないと考える。

人間社会学部が『人間』を基本に据えて現実の複雑な諸問題を広い視野から柔軟な発想で分析・理解・判断する能力を身につけること、そしてまた、21世紀の国際化・大競争社会で求められる情報処理能力・論理的思考能力・的確な判断能力を身につけること、すなわち、自立した人間としての基礎的能力を備えると同時に時代の求めるスキルとコミュニケーション能力を身につけた女性の育成を目指すという学部の理念は、以上のところにある。

Ⅲ 女子教育にかけた学祖の精神と人間社会学の教育理念

(一) 教育理念と教育の基本的な内容

いま大学教育が厳しく、しかも国民的規模で問われてきている。時代の要請に応える大学教育を真剣に模索しなければならない。人間社会学部は以下のように考えた。

自然環境の破壊、地球温暖化問題、生活圏共同体の解体の問題などに直面して、大量生産・大量伝達・大量消費・大量廃棄に象徴されるような近代産業文明が問い直され、科学・技術の飛躍的な発展の陰に垣間見られる生命軽視の学問・科学のあり方への批判が吹き出して久しい。周知のように、社会科学の揺らぎが議論され、また私たちがこれまで親しんできた社会科学は、「ヨーロッパ中心主義で、男性中心主義という性格を色濃く帯びていた」という深刻な反省の動きもあり、そこからの脱却が社会科学の世界で真剣に模索されるという動きも見え始めた。

このような動きの中で私たちは、従来の延長線上の発想と思考を乗り越えた、学際的で総合的な「知」の再構築を、新鮮な感性の持ち主である学生たちと共同で模索する教育を展開したいのである。人間の本源的欲求のレベルから、人間と社会のあり方を問い直し、人間不在と呼ばれることのない社会科学のあり方を、学生たちと一緒に構築する教育のあり方を模索していきたい。人間社会学部が、すべての学生と教員とが共に教え合い学び合う「学びの共同体」を講義室で、演習室で、実習室で無数に築き上げていく教育を声を大にして強調しているゆえんはここにある。学生たちの主体的な学習意欲の涵養や主体的な学習の活性化の方策だけで、「対話教育」・「双方向教育」を私たちは提唱しているのではない。

社会科学（社会学、経済学、経営学）、人文科学（心理学、教育学）そして規範科学（法学）など多角的な視点で、人間と社会について議論し、検討していくという教育を展開したいと考えている。

(二) 学祖の精神と人間社会学部の教育の試み

今日の学生の生育過程や日常の生活実態を考慮に入れると、新入生へのきめ細かな対応が大変重要になってきていることは言うまでもない。人間社会学部では、新入生が一日も早く大学になじみ、学び合い、語り合える仲間ができる機会を意識的につくることにしている。その一つはフレッシュマン・キャンプの実施である。一年次生から実施の少人数（22、23人）ゼミナールも、それである。大学でこれから学ぼうとする新入生たちの学問要求を大切に掘り起こし、大学での

学び方、大学生生活の確立のための支援を含めて、新入生向けゼミを新入生向け「転換教育」として重視している。そして、日々直面する社会的出来事や社会問題に「敏感に対応できる感性」を磨き、「鋭い問題意識」を形成し、事実や情報をどのように組み立てることが学問的で科学的な営みであるのかを学生と教員とがしっかり対話し、討論する。大学が新入生の学生生活の本拠地になるような支援をしていく。

少人数の中での対話・討論の訓練を積みながら、コミュニケーション能力・スキルを高める。そして、学園のキャンパスに「学び合い、教え合う共同体」を無数に形成することを目指す。それは大学教育の重要な役割の一つだと、私たちは位置づけている。

次に、社会調査実習、情報処理実習、インターンシップ（体験学習）などを重視し、“頭もからだ”も使った「学び合い教え合う」授業を展開する。学生と教員との共同で展開する“双方向教育”の授業形態を模索し、その確立を目指したいのである。

(三) 入学生すべてに対する教育責任

学部にも所属するすべての教員が演習を担当し、学生の卒業研究の指導にあたる。すべての教員が自分の専門を生かしながら、学生たちの多様な学習要求・学問要求に応える学部教育を目指す。すべての教員が学部学生の入学から卒業までの教育に責任を持つ学部にする。

私たちの人間社会学部は、総合社会科学部的なカリキュラムになっているので、学部の特徴を十分に生かすためには、いくつかの工夫と努力が必要である。複数の履修モデルを設け、学生が総合的で深い教養を身につけ、専門教育の基礎と基本を学べるような教育を目指す。学生一人ひとりが主専攻・副専攻を意識しながら、各自の履修モデルをつくる学習指導が必要不可欠である。

例えば、社会・心理の履修モデルコースでは、人間の意識・行動を科学的に解明する学問を通して、「人間理解力」を深めることを目標にする。現実社会に生きる人間の意識と行動を理解する能力を身につけるために、「調査実習」や「社会統計」など実践的な方法を使い、実証的に問題を解明する能力の形成に努める。一般企業（人事部門など）、NPO、NGO、医療・保険関係、大学院進学、産業カウンセラーなどの分野で活躍できる人材の養成を目指す履修モデルである。

現代ビジネスコースの履修モデルでは、職場で臨機応変に対応できる基本的な職業能力の養成を目指す。企業のあり方を学び、人との連携・協同の仕方を学び、貨幣の動きやモノの流れを学習する。さらにコンピュータースキルを磨きながら、インターンシップ（体験学習）を積み、即戦力としての能力を養成する。一般企業、金融・保険業、商社、公務員、中小企業診断士、外資系企業などで活躍する人材を育成する。

情報コミュニケーションコースの履修モデルでは、人と人、組織内や組織間、異質な他者とのコミュニケーション、国際間のコミュニケーション能力を養成する科目を充実させる。マスコミやインターネットなどさまざまなメディアについて学習し広告・宣伝・広報分野など新しいコミュニケーションの創造・発信ができる能力を養成する。情報産業、マスコミ関係、ジャーナリズム、企業・自治体の広報・企画部門などで活躍する人材の養成に努める、等々。

Ⅳ おわりに

人間社会学が歩き出し始めて半年が経過した。フレッシュマン・キャンプは、学生たちの親密度を急速に高めてくれた。仲間と元気で会話し、大声で談笑している姿を見るとやはりほっとする。独りでいる学生を見かけるとなんとなく気になる。私の耳に入ってくる学生たちの声は、“概ね満足している”“大学生活にも慣れて大学が楽しい”という声が大多数である。授業の感想文の多くが、“熱心だ”“熱意が感じられる”“講義が分かりやすい”と概ね好評で、ほっとする。しかし、見過ごして通れない声もないわけではない。数の上で多数を占めていないとしても、“大学はもっと楽しいところだと思っていた”“教員の熱意が感じられない”“どんな授業をやっているか、一度教室に見にきて欲しい”等々、厳しい、深刻な声もある。春 Semester が終わる時期の授業評価にも厳しい声が読み取れた。大教室の大人数授業や学問の性格上、推論したり、抽象度が高くなりがちな講義に、特に厳しい声が集中するなど、正直言って驚くと同時に学部長として自分の認識不足に深く反省させられている。FD委員会の早期スタートや教授会・学科会での教育論議を旺盛にし、授業改善に取り組む姿勢と方向を確認し、具体的な動きをつくり出さなければならぬと考えているところである。(本稿は、日本私立大学連盟の許可を得て、『大学時報』297号からの転載である。時間の経過もあって、「おわりに」などに加筆・修正した部分がある)。